
好きな人

千里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人

【Zコード】

N7801A

【作者名】

千里

【あらすじ】

一緒にいたいと思った人とずっといたいられると思っていた。

プロローグ

病室の中で一緒にみた夕陽

いと思った

大人にもならないで、ただ二人つきりのままで・・・

ただ私は健康な体と時間が欲しかった

このまま時間が止まればい

赤ちゃんの頃からずっと病院で育つてきた。
先天性の病気で、かなりの重い病気らしい。

保育園に行つたことがあるのは、指で数えられるくらい。

当然、友達はいなかつた。

だつたら、初めから通んなきゃいいのにって、母親と父親に対して
して小さいながらずっと感じていた。

そんな母親と父親は、私に太陽のように元気で明るい子になつてほ
しいと、陽子という名前をつけた。

名前と反対の状態で産まれてしまつたのが、凄く苦しかつた。
病院ですつといたので、ナ

ース全員の名前も医者全員の名前も知つていた。

つていてる子供がいた。

友達といつたら、その子たちくらいだ。

この病院を去る子といつたら、完璧完治して退院していく子か、大
人になれず、自分の夢が叶わず生きしていくことができなかつた子の
どちらかだ。

その中で私は、早く元気になりたい
とか、素敵なお嫁さんになりたいとかいう夢をもつことができなか
つた。

彼がこの病院に

きたのは、私が小学校4年生の頃だつた。

その頃

の私は、学校に行けなかつた毎日がとても退屈で、退屈で……そ
れでとても苦しかつた。
「母さん、凄くきもちわるい
んだケド。」

「またそんなウソ
をつく!いつもそんな弱音みたいなこと言つてると、いつになつて
も治らないわよ。」

んは私の病気が治ると信じている。こいつ治るかもわからない、死ぬかもしない病気なのに・・・。 「じゃあ、アツコはなんであんなに強気でいたのに、死んだの？」

「・・・アツコちゃんは頑張ったのよー。あんたとは違つて、頑張ってたわー！アツコちゃんは頑張ったのよー。あんたとは違つて、頑張ってたわー！」

「でも、アツコは死んだ・・・」

アツコは小さい頃からの友達で、私と同じくらい重い病気だつた。とても明るくて、看護師になる夢を持っていた。アツコが死んだのは去年の冬頃だった。

「アツコちゃんは頑張ったんだから、あんたアツコちゃんの分まで生きなさい。」

と母さんは悲しそうな顔をして、ベッドのとなりの花瓶の水を取り替えに行つた。

「カワムラコウコちゃん？」

病室の入口に背の高い、年上くらいの男の子が立つていた。
「誰ですか？」

「あつ、

「めん！こきなり声かけて驚くよね。俺、今日から入院する浅田雪太。変な名前だけど、よろしくね」

そう言しながら、変な顔をした。
なぜだか、私はアツコを思い出した。

「コキタくん？」めん、あたし

今母さんと喧嘩して機嫌悪いんだ。だから・・・

「

あつ、母さんひとき花瓶持つていつた人？挨拶してこよつとー！」

そう言つと、雪太は小走りで母さんのいふとこに行つた。

母さんらしき人が病室に入つてきた。

「陽子、雪太君とはもう挨拶したんだよね？あんた、仲良くなさいよ、同じ年なんだから。ねつ？ 雪太君」

「あつ、はい！」

ようしきね陽子ちゃん」

雪太はまた変な顔

をしながら私に挨拶をした。

雪太はどこかアツコに似た、明るい人だつた。

彼の病気

雪太が入院してきて、一週間が経つた。

雪太は毎日のように私の病室に遊びに来た。

「陽子！おはよっ！」

「おはよっ。雪太君、あのわ、雪太君きてから、勉強が出来ないんだけど！」

「じめんねえ。でもオレ、退屈でさあー初めにこの病院で話したの陽子だからさ。」

「あたし以外にも、入院してる子たくさんいるじゃん。その子たちとお喋りすればいいじゃん」

「だつてオレより年下ばつかだもんー。同じ年は陽子しかいないし。それにオレもつすぐ、治療がきつくなるらしくしてー。」

少し雪太の顔が暗くなつたような気がした。

「ねえ、陽子の病気つて何？」

「あたしの病気は……心臓の病気なんだつて。だから、いつになつても治らないんだ。」

「……やつとちゃんとしゃべつてくれたー。」

雪太がいきなり笑顔になつて、大きな声を出したから、少し驚いた。

「何ー？ いきなり！ あたしの話まともに聞いてないじゃん！」

「ごめん、ごめん！ だつていつも、そつ……とかうん……とか、ひどい時はごめん今話かけないでくれる？とかしか言つてくれないからさー。」

「ああ、そつか。ごめん。今日が最初で最後かもねえ。」「そんなこと言わないでよっ！ 陽子チン！」

そういうと雪太は変顔をして、私を笑わせた。

「ふつ、つふふ。」

「やつと笑つてくれたあー陽子ちゃん全然笑つてくれなかつたもん。俺超うれしい でもおー陽子の笑い方つてちょっとだけじゃないね！」

「……あつそーぢやあ、一生あんたの前では笑わないから……」「「めん、「めん！ ちょっとからかつてみただけだよ！ 本気でそんなこと思つてないからね」」

雪太の明るさは、私の気持ちに太陽があたつてゐるような感じがした。今まで同じ年の子と話していたことはあるが、ほとんどの子は無理矢理元気なふりして、不自然で、私はこんな無理矢理なことはしないとずつと思つていた。

「雪太の病気は何？」

「俺の病気？」

俺まだわかんないんだあ。これから検査するらしいけど、それがかなりきついらしいよ！ まいつちやうよな！」

「そう……まあ、頑張つて。」

「何？ それだけえ？？ 俺もつと心配されてえなあ。」

「病気もわかんないのに心配するわけないでしょ。」

それから、少したつて雪太の検査が終わり、雪太自身も自分がなんの病気かを知つてもいいころなのに、雪太は病気を知らなかつた。

「ここにちはあ 陽子チン！」

「おはよ。つて、あんたあたしの病室来ていいの？ 病気もわかつて、治療も始まつてるんじゃない？」

「始まつてるけど、きついんだよなあ、治療。昨日なんかゲボしちやつたよー！」

「 . . . わう。」

「何？心配してんの？」

「大丈夫だよ！俺どんな治療でも頑張るし、まだ病気はわかんないけど、とにかく治してみせるよ。やりたい」とこつぱいあるし！」

『陽子、あたし絶対病気治してみせる。陽子一緒に頑張る。そしたら、一緒に中学行こ。』

なぜだか、アツ口の言葉を思い出した。

「わかんない病気になに強気になつてゐるの？完璧治るなんて、言ひきれない。

あたし見てみなよーいつになつても治らないじやんーー
頑張つたとしても、治らないもんは治らないよーーー。」

「 . . . そり、じやあ、陽子ちゃんはずつとこの病院にいればいいじやん。俺は治すから。陽子ちゃんに病気が治らないつて決めつけないでほしーなあ。陽子ちゃんみたいな弱虫に！俺は治すからなーーー！」

初めて見た雪太。

怒つてる雪太。

「 . . . ジめん。」

「あつ、別に誤らなくともこいつーちょっと強く言ひすぎたね。俺じやあ、『じめんね！』

「 . . . びやあ俺気持け悪くなつてきたからゲボ吐いてきまーす」

いつもの雪太に戻つて、自分の病室に戻つて行つた。
さつき、雪太に言つた言葉を揉み消したい。弱虫な自分を潰したい。
そんなことを思つたら、止まらず涙が溢ってきた。

悔しくて、自分がすぐ嫌で。

それから、一週間後、雪太の病気がわかつた。
アツコと同じ病気だった。。

アツコと回り

雪太の治療が始まってから、雪太は前より私の病室に来る回数が減つた。

病室に来たとしても、具合悪そうで、無理してきてる感じがした。

「陽子つ

「ねつ？ こつち来ていいの？ なんか無理してない？」

「無理してるよ！ 無理しても、陽子と話したいからさ」

「あたし、無理してる人嫌なんだ。」

「そう！ ジやあ、無理しない！ だから、明日も来れたら来るよ。」

「あの、話わかつてる？」

「おわかりですよ」

「. . . 」

「ねえ、陽子ちゃん、陽子ちゃんつて友達一人もいないの？」

「いない。」

「ウソでしょ！ 俺聞いたよ。大切な友達がいたつて . . . 」

「誰から聞いた？」

「母さんでしょ！ くだらないこと話して！」

「あつ、でも聞いても悪い事じやないじやん！ 陽子も普通の女の子と一緒なんだなあつて」

「. . . そう。」

「でも、アツコは死んだよ。」

「. . . ジやあ、俺がアツコちゃんつていう人の代わりになるよ！」

「そうすれば普通の明るい陽子になる」

「あんたがアツコの代わりなんてできない。」

「それほど大切だったんだ。」

「大切だったよ . . . 」

雪太は少しずつとだけど私の中に入ろうとしていた。無理矢理では

なくて、気づくことのない。

それから3日後雪太が私の病室にこなくなつた。

なんとなく心配になつたので、初めて雪太の病室に行つてみた。

雪太の病室には雪太の小学校の友達が5、6人ほどいた。

「あらー、陽子ちゃん、入口にいないで入りなさいよ。」

ポンと私の肩を叩いて、雪太とそつくりな笑顔でいた雪太のお母さん。

「あつ、別にいいです。ただししばらく私のところにきてなかつたので、ちょっと様子見たかつただけです。

でも、元気みたいですね！」

「まあ、今小学校の友達が来てるみたいだから。そつか、雪太の友達たくさんいるから、行きにくいか？」

「別に全然大丈夫です！元気そうで良かつたです。」

「そう？じやあ、また後で来てちょうどいい！ヨキ喜ぶからー。」

「来れたら来ます。」

雪太のお母さんは雪太にそつくりだ。喋り方とか、笑い顔とか。

「じゃあ、私戻ります。」

「はあい！後で来るんだよー！」

「あつ、はい。」

自分の病室に戻り、学校から出された学習プリントをしていたら、雪太のお母さんがきた。

「陽子ちゃん、ちょっとといい？」

「あつ、はい……。」

「ごめんね！いきなり来ちゃつて。」

あつー勉強してた？『ごめんね！』

「あつ、別に大丈夫ですけど。なんかありました？」

「『ごめんね、いきなりい！』

えつとねえ．．．その、雪太の病気のことなんだけどね。』

「．．．はい。』

「その、雪太、陽子ちゃんのこと好きみたいだし、陽子ちゃんには雪太の病気言わなくちゃいけないと思つてね！」

「．．．はい。』

「雪太の病気ね、白血病つていう病気なの。．．．結構大変な病気なんだけど、あの子なりに頑張ってるし、もしかしたら治るかもしない！だから、陽子ちゃんには雪太と仲良くしてほしいの！雪太、陽子ちゃんを初めてみた時から、俺早く元気になつて、陽子ちゃんに俺のかっこいいところみせるんだ！－つて言つていたから。』

「．．．ごめんなさい。雪太君の病気は治らないかもしないですよ。私の友達が雪太君と一緒に病気で死んでますから。』

「陽子ちゃんはこれから、そのことをいわないでほしいの！』

おばさん、コキを信じてるし、陽子ちゃんにもコキのこと信じてほしいの！お願い！』

雪太のお母さんの言葉の一つ一つが重く感じた。

「．．．できればします。』

「ありがとう！－！』

これからもコキをよろしくね！』

そういうと雪太のお母さんは出て行つた。

『陽子、将来何になりたい？』

とつあえず、この病院を早くでたい．．．。

『そうだね！それが一番だね

あたしね、陽子と一緒に中学行つて、一緒に部活入つて、一緒に頑

張りたいんだ！！

ソフトボールやるのー！

ちょっと勝手に決めないでよ。

『だつて、あたしがそいつ言わないと何もしなそんなんだもん！』

アツコに言われなくとも、やりたいことくらいはあるわよ。

『何やりたい？』

絵描きたい。

美術部に入つて、たくさんの絵を描いて、賞たくさんもらつたの。
『そつか。良かつた！じゃあ、あたしが校庭の外でソフトの練習してることりを、陽子はあたしの姿を絵にするの』

それがアツコとともに話した、会話だつた。

台風が近づいてきた、8月中旬。

雪太は今日も私のところに来てない。

「……雪太？」

しうがなく、私は雪太の病室に行つてみた。

「おうつ！

陽子ちゃん、おはよー。』

雪太は青いキャラクターのバンダナをしていた。
雪太の髪の毛はなくなっていた。

「最近こないけど、大丈夫?」

「心配?」

「正直心配 . . . 」

「ありがとう。

陽子、俺の頭なんとも思わない?」

「バンダナが似合う。」

「そつか!

ありがとう。俺こんな姿、陽子に見られたら余計嫌われちゃうよ
うな気がして、陽子の病室行けなかつた。」

「 . . . そんなの気にしないで。」

元気な雪太が細く弱まつていた。

「ねえ、陽子。

アツ「ちゃんつてどんな病気だつた?」

「なんで?」

「俺、アツ「ちゃん」と同じ病気かなつて、なんとなく思つて。」

「だとしたら?」

「 . . . 俺それでも、そんなこと関係なく、とにかく治すから。」

「うん。」

雪太の病気を治すという気持ちだけは衰えていなかつた。
ただ凄く、かつこよくみえた。

「雨すごくなつてきたみたいだね?」

「そうだね . . . 」

「テルテル坊主つくるつか! 一人で!」

「作つたつて、外でないでしょ。」

「俺、雨より晴れが好きだもん！」

「ねつ！作ろ！」

「しようがないねえ。」

それから二人して、ティッシュのテルテル坊主を作つた。雪太の作つたテルテル坊主は、頭だけでかくて、顔いつぱいの笑顔のテルテル坊主を作つていた。

「変なテルテル坊主。」

「別にいいじやんかつ！かつこいいだろ！俺のテルテルちゃん」

それから、雪太の病室の窓に頭のでかいテルテル坊主と頭と体も小さいテルテル坊主をぶらさげた。仲良く肩を並べたテルテル坊主。

「陽子ちゃん、

俺陽子ちゃんが好きだよ。初めて見たときから。」

「うん・・・ありがとう。」

私も雪太のことが好きだつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7801a/>

好きな人

2011年1月13日01時16分発行